

書簡 六 (新編井月全集 513)

あかほむら といや はらさとらはげんばち けだ てがみ おりたみ うえ いいじまきちの じょうあて い りゅう
赤穂村の問屋、原里原源八家から出した手紙で、折畳の上か飯島吉之丞宛になって居る。(柳
さいしぞう
哉氏蔵)【問屋とは、宿場役人の家のこと。】

ちよっときゅうようもうしあげそうろう
一寸急用申上候

あかほがくめん ぎ つき いろいろ てまどり なんぼくほんそううつ がえなんぎ それゆえかねて もようま あいかね はんこうえん
赤穂額面の儀に付、色々手間取、南北奔走移り替難義、夫故兼而(カ)の様相間に合兼、板行延

いんには あいなりそうら えども
引二者(カ)相成候へ共、【赤穂で奉納額を作っていたので、いろいろ手間取ってしまい、衣
替えにも難儀し、それがかねてからの計画が間に合わず、刷り物の作成が延びてしまいましたが、】

{「額面」は、門人たちの俳句を額装にして、神社などに奉納すること。「移り替」は衣替えのこ
と。「板行」は版木に彫って印刷すること。なにか俳句集のようなものを計画していたのであろ
う。}

らいげつおきなき ごほうぜん ごこうぎようくだされたく うわぶ あかぎ しもまき おもてぎ しゃちゅうもうしあわせしゅつとうつかまつるべくそうろう
来月翁忌を御宝前にて御興行被下度、上部、赤木、下牧、表木社中申合出頭可仕候

あいだ なにぶんどもおせわ ほどふしてねがいあげたてまつりそうろう
間、何分共御世話の程伏而奉希上候。【来月の芭蕉忌に、御宝前にて連句の会を開いて
いただきたく、赤穂の上穂(×上部)、西春近の赤木・下牧・表木の仲間たちも申し合わせて行
きますので、なにとぞお世話をお願いします。】{「翁忌」は松尾芭蕉の命日のこと。「興行」は連
句の会のこと。「御宝前」は神仏の前という意味だが、たぶん床の間に、芭蕉の像か掛軸を飾っ
て、その前で連句の会を開いてほしい、という意味ではなかろうか。}

しごにち うちには ぜひとむたいれに え あいなりそうら え ちよっとさんじょう そのせつ さいおはな もうしあぐべくそうら え
四五日の内ニハ是非共綿入ニ(カ)さへ相成候へば、鳥渡参上、其節委細御咄し可申上候へ

ども ただいま ばあい じつにてっぶ うお ごすいきつなしくだすべくそうろう しょうがいはいほうぼる もうしちぢみそうろう きょうきょうとんしゅ
共、只今の場合には実轍鮒の魚と御推察可成下候。書外拝鳳万縷と申縮候。恐々頓首【四
~五日のうちに、羽織に綿を入れてもらうためにちょっと参上します。そのときに詳しいお話を
いたしますが、今は急いでおりますことをご推察ください。】{「綿入」は、羽織に綿を入れて冬
仕度をする事。「轍鮒の魚」は「轍鮒の急」の間違いではなかろうか。緊急事態のことである。}

くがつに じゅうしちにち
九月二十七日

なお おごしゃちゆうさま そんくんがた よろしく ごかくせい ほどひとえにねがいあげたてまつりそうろうなり
尚々御社中様へ尊君方より宜御鶴声の程偏奉願上候也【なお、お仲間の皆さまにも、

あなた方から宜しく伝えてください。】{「御鶴声」は、あなたの言葉、という意味。}

せいげつきゆうはい あかほといやはらさとていきやくちゆう
井月九拝 赤穂問屋原里亭客中

りゅうさいくん ひょうさいくん おんちゆう かみどのじま いいじまきちのじょうどの はいよう
柳哉君 瓢哉君 御中 上殿シマ 飯島吉之丞殿 俳用